日本はアメリカに愛されているのか？　宮平真弥

月刊 社会民主

ISSN 1342-0615

1957年8月7日第三種郵便物認可　2018年7月1日発行　毎月1回1日発行　第758号

特集

「9条以外」も危ない安倍改憲

安倍首相の教育「無償化」改憲は何をもたらすか　永山　茂樹

参院・合区解消のための改憲について考える　只野　雅人

憲法24条――家族をめぐる権利保障と憲法改正論　志田　陽子

情報を市民に取り戻すために――規制と自由の観点から(下)　田島　泰彦

2018年
7月号
No.758

金丸弘美の

田舎力 地域力創造

VOL. 101

フリー・ライターたちの表彰式で見えなかった「ソフトの力」を確認

「大賞」を受賞した棚沢永子さん

左から、ちかぞうさん、光畑さん、竹中さん

東京の情緒あふれる森の中のカフェ

クリエーターの集まり「ライターズ・ネットワーク」では、毎年、参加メンバーの表彰式を行なっている。1年間の仕事を通して功績のあった会員に賞を贈るというものだ。「身内を身内が褒めなければ誰が褒める」と提唱して始まったもの。このネットワークはフリーライター、エディター、カメラマン、イラストレーターなどの集まりだが、フリーランスで仕事をする人たちが評価される機会は少ない。

ほんとに小さな集いだが、賞はメンバーのモチベーションをうんと上げるらしく、受賞は喜びもひとしおのようだ。受賞者は仲間うちからも祝福され、それぞれが受賞の祝賀会をしてもらっている。彼らのほとんどが裏方の仕事だ。特に地方で活動をする人が少なくないため、なかなかスポットが当たりにくいということもあり、受賞は時代の流れを発信する仕事にスポットライトを当て、これまで見えなかったソフトの力を確認することとなる。あらためて彼らの仕事を知ることで、こちらが刺激を受けて、ヒントをいただけるということがたくさんある。

6月9日、2018年度ライターズ・ネットワーク総会と受賞式が東京大学駒場キャンパスに隣接する日本近代文学館

和歌山県の移住セミナーに呼ばれた長男（左）

内喫茶室文壇カフェで開催された。

大賞受賞者は棚沢永子さん。著書『東京の森のカフェ』についてである。同書を出版したのは福岡の「書肆侃侃房（しょしかんかんぼう）」。棚沢さんは、同社の東京営業を担当している。営業に行った書店で、かつて東京の森のレストランを紹介した本が売れたことがあるとの話を聞いて、会社に伝えたところ、あなたがやってみればと言われた。カメラを購入し、自分で都内のカフェ巡りをして、3年がかりで本をまとめたという。きれいな写真と共に、店主の思いや風景やたたずまいなどがエッセイ風にまとめられている。どの店も情緒豊かで、とても都内にあるとは思えない安らぎを与えてくれそうだ。東京なのに森の中のカフェという意外性が共感を得たのだろうか。よく売れている。現在5刷で、2万部を超えたという。

東京というと、都市のビルや再開発ばかりが目立つのだが、そうしたイメージと全く対照的な場所も多くあり、クリエイティブで持続性がある場があるということを、『東京の森のカフェ』は教えてくれる。ひょっとして、これが最先端なのかもと思わせる一冊だ。

世界に広がる有機農業のネットワークWOOF

棚沢さんの勧めで興味をもったのは、東京・日野市にある「クレアホーム&ガーデン」。600坪の自宅兼カフェ、家具工房だ。WOOF（World Wide Opportunities on Organic Farms「世界に広がる有機農場での機会」）に加盟していて、世界中から、ウファーと呼ばれる登録をした人たちが、お手伝いにやってくる。

WOOFのことは地方の農家に泊まったときに知った。参加費を払えば、登録されているホストのところに無料で泊めてもらえる仕組みだ。その代わり、宿泊者はホストのお手伝いをする。もともとは英国から始まったもので、大学生が田舎の農家やB&B（農地のある宿泊施設）に手伝いに行くことから始まり、それが好評だったことから世界中に広がった。今では世界60ヵ国に事務局がある。

日本でもすでに受け入れ先ホストが500ヵ所近くある。ちなみにWOOFジャパンの事務局は札幌市にあり、17年度「オーライ！ニッポン大賞」（主催は農水省）で審査委員会長賞を受賞している。それでも、まさか都内にも登録ホストがいるとは思わなかった。

「ライターズ・ネットワーク」大賞の話に戻る。特別賞を受賞したのは【社会に働きかけたで賞】に「全日本おっぱいサミット」実行委員会の光畑由佳さん、竹中恭子さん、ちかぞうさん。【次々によく出したで賞】に年間に3冊の本を出版した松鳥むうさん。それに金沢でフードコーディネーターとして活動するつぐまたかこさんが【地方を盛り上げたで賞】を受賞した。

子育てのしやすい市町村サミットを

「全日本おっぱいサミット」実行委員会の【社会に働きかけたで賞】受賞は、17年に行なったイベントについて。光畑さんは授乳服を企画・制作・販売する「モーハウス」の代表。竹中さんはお母さんの授乳相談をしている。ちかぞうさんは、子育てに関するさまざまな取り組みを取材して書いている。

このサミットは、「公共の場での授乳問題」が持ち上がったことから授乳への理解を広げようと行なわれた。準備から開催まで、かなり大変だったこともあり、今回の受賞は大きな励みになったそうだ。次のサミットを開催する計画が持ち上がっているという。受賞後の懇談会で、ちかぞうさんといろいろ話す機会を

得た。彼女は双子のママで、育児はまさに生活そのものである。

次回のサミットでは「旅」をテーマにしようとの構想があるという。そこで筆者が提案したのが、地方での定住と暮らしの中での具体的な子育て支援とをマッチングさせて、それを市町村と連動させたシンポジウムにしたらどうか、というもの。

そんなことを思いついたのは、筆者の長男夫婦が和歌山県田辺市に移住したことからだった。

⬇ライターズ・ネットワーク大賞受賞式

和歌山県は移住・定住政策に熱心で、東京・有楽町の交通会館内にある「ふるさと回帰センター」に常設コーナーを設けている。大々的な移住セミナーも毎年開催している。今年は、6月10日に行なわれたが、そのセミナーのトークイベントにはゲストの1人として長男も登場した。

彼は地域の食材を使いジャムの加工販売を、妻はヘルパーをしている。子どもは1人で、今は中学生だ。和歌山県は子どもがいる家庭が移住する場合、最高250万円の援助をしている。また起業する場合には100万円までの支援もある。

妻のヘルパーとしての賃金は、東京にいたときとそれほど大きく変わらないという。ところが田辺市では家賃が3LDKで2万5000円。物価が安い。食費もかなり安い。ヘルパーの仕事で十分やっていけるそうだ。

おまけに田辺市は、若者の起業支援塾を行なっていて、若い人たちに呼びかけて大学、市との連携で起業セミナーを開催している。その中で、なるほどと感心したのが、工務店に務める若い塾生が考えた、空き家を利用した、子育て世代向けが暮らしやすいリノベーションである。全国で空き家が増えている。田辺市も例外ではないが、その空き家を子どものいる家庭向けに改装して貸し出そうというものだ。

和歌山県が移住支援を行なっていることから、ある程度、若い子育て世代が移住してくるようになった。そこで生まれたプランである。

ちなみに、光畑さんは茨城県つくば市に住んでいる。茨城県常陸太田市は子育て支援の一つとして授乳服のプレゼントを行なっている。同市は子育て支援に熱心で、子どもが生まれるとおむつ代に2万円の支援があり、第3子からは保育園無料、新婚で住むと毎月2万円で36ヵ月助成などの制度がある。

今、各地で人口減が始まっている。首都圏の神奈川県、埼玉県、千葉県でも事情は同じだ。であれば、家賃、賃金、物価、子育て支援、空き家対策などで東京よりも子育てをしやすい環境の市や町を紹介して、都市のすぐそばでも都会ではない地域に住む方が子どもの成長や健康のためになるということを、具体的に見せるサミットを開く――というのが、ちかぞうさんたちに提案したことだった。ぜひ実現してみたいものである。